

第1回

医師(医院)と鍼灸師(鍼灸院)(あるいは薬剤師も含む)との地域連携の実現を目指す会

『医鍼薬研究会(仮称)』の概要

(2017.10.4 帝京平成大学池袋キャンパス605号室)

初回にかかわらず、唐沢先生のおかげで、北川先生など著名な鍼灸師、歯科医師の福岡先生のところで活躍されている帝京平成大卒業生や帝京平成大学の学生や教員の方々などが沢山集まって頂きました👏

ただ、吉祥寺中医クリニック院長の長瀬先生が、ご親戚のご不幸で、急に参加出来なくなってしまったのが残念です。

医鍼薬の連携は、谷美智士前理事長の診療形態としてなされていました。実際に、医療の基本として必要であることを原山先生が言葉の語源から、私が身体観から、内治と外治の複合効果の方が単独な場合よりも効果的になることなどを説明することで、皆さんの同意が得られたと思います。具体的には、医師や歯科医師の治療で不足した部分を鍼灸師が補い、鍼灸では治療できない部分を歯科医師や医師、あるいは薬剤師が補うという具合に相補的な関係で活動することが必要であることが確認できました\(^o^)/

将来の理想としては、鍼灸師が医療におけるハブ機能を担えるようになると、医療崩壊の危険性が少なくなることも、まさに鍼灸師の方々や学生さんにもお伝えしました。

ただ、その場合、鍼灸の手技が多様なので、医も鍼も、お互いに得意分野を知っていないと、うまく連携が進まない危険性が指摘され、本連携研究会の意義が再認識されました。

さらに、その為には、医と鍼が共通の電子カルテを使うようになると良いという提案がありました。電子カルテになる場合には特に、鍼灸の証に関して標準化が必要であることが、鍼灸会のリーダーの一人の方から情報を頂きました。実際、電子カルテは、鈴鹿科学医療大学鍼灸学科の佐々木教授が、三重大や名古屋大学で統合医療を実践されておられる時に既に活用されていると聞いております。しかし、その場合、来年にICD11が決まれば、アジア三国それぞれでの標準化ができること、日本では経脈診断が使われるであろうという情報も頂きました。

更にまた、連携と言う場合、治療での連携だけでなく、予防医学における地域連携や、災害時の地域連携なども東洋医学(東方医学の方が中国でも通用するグローバルな呼称)の専門家としての鍼灸師が、医師だけでなく公共団体の健康教室などで、特にツボや薬膳に関する養生について地域連携できると思われます。実際、実際目黒区鍼灸師会のツボ講座と薬膳講習会の試みや、帝京平成大学の宮崎准教授などの小学校でのイジメ予防対策にもなるMテストの可能性、ホリスティックケア協会の泉先生からは、千年灸を使ったセルフケ

アや、乳児へのベビーマッサージ（鍼灸医学での小児鍼灸）の必要性の提案がありました。日本東方医学会も、薬膳や未病体質なども含めて学習することで、東洋医学アドバイザー、更には東方医学認定医、東方医学専門医などの資格を認定する活動もおこなっております。

災害時における地域連携についても、帝京平成大学今井教授らの活動の紹介がありました。

これらの活動を支えるためにも、医師や地域の健康教育担当者へのエビデンスを紹介する鍼灸の現代医科学研究が必要になります。近年は、鍼灸大学も増え、代表的には明治国際医療大学の研究を始め多くの研究がなされるようになりました。そのような研究を懸命にされている帝京平成大学協助手(久島、今井教授の指導の元、鈴木大学院生と共に)の意欲的な発表がありました。私自身は、鍼灸の作用機序を現代医科学の用語や解剖生理学で説明できる一例として、刺絡の作用機序に関する一報を東方医学会誌に報告しておりましたので、別冊「刺絡の作用機序に関する考察：その1」と題した論文を参加者に配布しました。

最後に、高齢化の進展に伴い、死にゆく人々を、鍼灸師は医師達とともに診ることが増えてくることになっていきますが、生と死の問題についても、それなりの考えを医師はもちろん、鍼灸師も持っていないといけない時代です。それには、温故知新の智慧の中に、生き方だけでなく死に方の智慧がありますので、それを医師も鍼灸師も薬剤師も、患者と同じ人間の立場から、連携しながら学ぶ必要があるとの提案もありました。

最初にしては、かなり手応えが有った研究会になったのも、参加者の皆さんの活発なご意見が有ったからだと思います。ただ、医師の参加が、長瀬先生が参加できなかったこともあり少なかったことは残念でした。東方医学会には、医鍼薬連携に協力的な医師も多数おられますので、今後は、そのような方々の参加を増やしていきたいと願っております。

また、医鍼連携を進める会は、他にも、長谷川先生の医鍼連携協議会や、織田先生のNPO統合医療ネットワークなどがあります。また日本東洋医学会や日本統合医療学会、もちろん全日本鍼灸学会なども医鍼のコラボの必要性は提唱されていますが、当学会でも、再来年に医鍼薬連携をテーマにして赤羽先生を会頭にしたい年会を開催し、日本における同じ意向に人たちとコラボすることを考えております。また継続的な活動として、東方医療振興財団のホームページで、会員の医院と会員の鍼灸院、薬局などを紹介したり、養生に関する活動をするヨーガや気功などの団体を紹介する欄を設けることも考えております。是非、会員になっていただければ幸甚です。

一般財団法人東方医療振興財団 理事長 上馬場 和夫、評議員 赤羽 峰明 拝